

李華の「春行興を寄す」

報告：花岡風子

今月のお題は、盛唐時代に作られた「春行興を寄す」という詩でした。作者の李華は杜甫とほぼ同年代の盛唐の詩人です。杜甫ほどには有名ではないものの、『唐詩選』をはじめ各種の詩選集に出て来るほどの詩人であり、散文の名手としても知られています。この作品も中国で人気があるそうです。但し、後世に伝えられた作品は、この一作だけです。

chūn xíng jì xìng
春行寄興

lǐ huá
李華

yí yáng chéng xià cǎo qī qī
宜陽城下草萋萋
jiàn shuǐ dōng liú fù xiàng xī
澗水東流復向西
fāng shù wú rén huā zì luò
芳樹無人花自落
chūn shān yī lù niǎo kōng tí
春山一路鳥空啼

hà r chūn xíng xìng wèi jì sū
春行興を寄す

gī yáng jī yáng xià cǎo qī qī wèi
宜陽の城下、草萋萋たり

kān suǐ dōng liú fù xiàng xī wèi xiàng
澗水東に流れて、復た西に向かう。

fāng shù wú rén huā zì luò
芳樹人無く花自ずから落ち

chūn shān yī lù niǎo kōng tí
春山一路鳥空く啼く。

「春行興を寄す」と題されているように、春の風景に興味を寄せて詠んだものでありながら、内容は杜甫の「国破れて山河あり」を連想させる、どこかもの淋しいものになっています。宜陽とは『三国志』にも出て来る有名な街の名で、現在の河南省洛陽市宜陽県にあたります。

ここには、唐の時代、皇帝の行在所がありました。皇帝の観光名所として賑やかな街であったようです。その街は、作者が訪れた時には草が茫々と生い茂って荒れた姿になっています。作者が旅の者であることは書かれていないのですが、「草萋萋たり」という言葉が屈原の『楚辞』の典故である

ことから、作者の旅姿が連想されます。

『楚辞』招隠士の「王孫遊兮不帰、春草兮萋萋」（王孫遊びて帰らず、春草萋萋たり）という一句は、国から追放された楚の王族の屈原が旅に出たまま故郷に帰らない、春の野にはただ草が茫々と生えているだけ、という意味です。この詩の主人公の王孫が具体的には誰を指すのか必ずしもはっきりしませんが、おそらく屈原をイメージして作られたものと思われます。よって、後世「萋萋」の二字がくると、必ず屈原の孤独な姿が思い浮かび、旅や別れを連想し、孤独な旅に自分が出ているか、そういう旅人を家で待つ、というニュアンスが生まれたようです。このように漢詩は韻律を整えるだけでなく、典故をちりばめるという技巧も凝らされています。「相声」という中国の漫才も、古典を知らなければ笑うことが出来ませんし、現代のトレンドドラマの会話の中でも、古典からの引用句の多さに、改めて驚きます。中国語の学習者もある程度以上のレベルになれば、古典を学ぶことが避けて通れない理由です。

さて、澗水とは谷川のことですが、東に流れて、また西に向かう、とは川が湾曲している様を表現しています。中国人は湾曲した川を好むようです。河川の曲がりくねった地点は観光地になったりしていますし、中国の風景写真展でもこのような地形を被写体にした作品をよく見かけます。時代は少し遡りますが、王羲之の『蘭亭序』に出てくる曲水の宴はそのような趣向が伝統行事化した一例です。

芳樹とは、花の咲いた木なので、春に花咲く桃や李でしょうか。「人無く、花自ずから落ち」とは、花を愛でる人がかつては大勢いて賑わっていた時代があったことを思い浮かべているようです。「春山一路、鳥空しく啼く」とは美しい春の風景は変

わらないのに、かつて栄えたところが、今は人気^{ひよが}がなくなり、鳥の声だけが辺りに空しく響いているという意味です。一見、春の美しい風景を詠んだような詩に思えますが、この詩を詠んだときの作者の状況を植田先生が解説して下さいました。

時はちょうど安祿山の乱の後。李華は乱が起きた時、叛乱軍の占領地帯にいた母を救い出そうとして賊軍に捕らえられてしまいます。乱が治まった後に、李華は賊軍に協力したという罪を着せられ左遷させられてしまいます。その後、官を辞して都を離れ、あちこちを転々と旅していたのです。

こういう背景を知ると、運命に翻弄され、左遷の憂目に遭った元役人が、旅の途中にかつては活気に満ちていた街に立ち寄り、それが、廃墟のように静まり返っている様子を目にしたときの暗澹とした気持ち、なんだかりアルに迫ってきますね。三句目の「芳樹人なく、花自ずから落ち」からは、作者の目が、華やかに咲き誇る花よりも、寧ろその盛りを誰にも愛でられることなく散っていく花の方に向いていることが伝わります。それはあたかも才能ある人が世の中に認められることがなく

うずもれていく状況と重なります。

幼いころから才能を認められ、科挙に合格して役人になるというエリート街道を歩いてきた李華にとっては、目の前で人知れず落ちていく花に自分の身を重ねたのではないのでしょうか。後に、左補闕・司封員外郎として召されたが、辞退しています。一時は江南観察使の幕下に入ったが、病気のため辞職して、晩年は田舎に隠棲、農耕に従事して世を終えたそうです。

このような背景を知ってから朗読すると、最後の三文字「鳥空啼」に込めた心の虚しさ、無念さも、一層深く感じられ、「鳥空啼」の三つの音の響きにも、おのずと格別の感慨が出てきました。

詩の構成は、一、二、四句の最後を平声で押韻し、三句目の末尾は仄声で韻を外しており、

後半二句は対句になっています。現代語で音読しても読みやすく非常に美しい詩です。「掛け軸に掛かっている一幅の絵を想像しながら、詠んだら良いですね。」と植田先生。一同声を合わせて、朗読練習をしました。